

模擬患者（SP）を活用した成人看護学慢性期 事例演習での学生の学び

高橋奈津子*¹・庄村雅子*¹・佐藤幹代*¹・佐藤正美*¹・小島善和*¹

The learning of the SP participation type case study practice in adult nursing of chronicity period

Natsuko TAKAHASHI*¹, Masako SHOMURA*¹, Mikiyo SATO*¹,
Masami SATO*¹ and Yoshikazu KOJIMA*¹

〈抄録〉

わが国では、近年、医療の高度化、複雑化に伴い、看護基礎教育課程における確かな看護実践能力の育成が求められている。そこで本学成人看護学領域でも、看護過程の展開、対人関係形成能力などの看護実践能力を主体的に着実に習得できるよう成人看護学慢性期看護論で Simulated Patient（模擬患者以下 SP と略す）参加型的事例演習を取り入れた。

本研究では成人看護学慢性期看護論の SP 参加型事例演習の学生の学びを明らかにすることを目的とし、研究承諾が得られた58名の学生のレポートの記述を分析した。結果、38サブカテゴリー、9 カテゴリーが抽出され、〈看護過程に関するリアルな学び〉、〈自ら学ぶ力をつける〉、〈自ら学ぶことの困難〉、〈全体としての学び〉に分類できた。SP 参加型的事例演習は、学生にとってリアルな学習であり、効果的な実習の準備教育となり、看護実践能力の向上を促すと考えられる。また SP 参加型的事例演習では、特に SP からのフィードバックがもたらす影響が大きく、学生の学びを深めることが示唆された。

Key words：模擬患者（SP）、慢性期看護、事例演習、看護実践能力

I. はじめに

わが国では近年、医療の高度化、複雑化に伴い、看護基礎教育課程における確かな看護実践能力の育成が求められ、Simulated Patient（模擬患者以下 SP と略す）参加型の教育方法や客観的臨床能力試験（OSCE）など様々な取り組みが行われている。

SP 参加型の教育方法は、1975年にカナダの McMaster 大学の H.S.Barrows 教授により日本に紹介された。当初は、あまり注目されなかったが、患者中心の医療が求められるようになり、コミュニケーション教育の必要性や OSCE の導入により医学教育の中で取り入れられるようになった。SP 参加型の教育は、利用しやすい（Availability）、反復性（Repeatability）、信頼性（Reli-

ability）、コントロール可能（Controllability）、適応性（Adaptability）、患者に対する危険がない（No risk for patient）、学生の不安が少ない（Student anxiety）、患者からのフィードバック（Feedback from patient）、時間の制約がない（No time restriction）という利点が一般的にあげられている（清水ら、2008）が、反面、SP の参加型の教育方法が開発途上であること、チューターの力量によって学習効果に差異が生じること、SP 養成教育も試行錯誤の状況であり、SP の質にばらつきがあることなどが欠点としてあげられている（藤崎、2001）。

日本の看護教育における SP 参加型の学習は、1990年代に始まり、徐々に活用がふえてきている。特に基礎看護領域でコミュニケーション、ADL、実技試験（OSCE）、看護過程（主に情報収集・アセスメント）、

*1 東海大学健康科学部看護学科

フィジカルアセスメントなどに活用されていることが多い（宮崎、2005）。その利点として先行研究では、臨場感をもって演習に取り組めること、コミュニケーション技法、コミュニケーションの難しさ、自己のコミュニケーション傾向への気づき（相原ら、2007、肥後ら、2006、出原ら、2006）、対象理解の深まりなどが（加悦ら、2007、三沢ら、2007）あげられていた。また SP は、教員、医療者、上級生、一般市民など背景は多様であった。

成人看護学領域は、カリキュラム上、様々な専門基礎科目や基礎看護学をふまえ、看護実践の応用力を身につけるため、事例演習においてもより実践的な演習がのぞまれる。通常の紙上演習では、情報が限定された中での学習であり、実際の看護過程のダイナミクスを体験することは難しい。そこで本学成人看護学の慢性期看護論では、一般市民の SP を活用し、慢性期にある患者の個性性を考慮し全人的に理解すること、対人関係形成能力とともに看護過程を実践・評価まで実施することで演習から臨地実習に向け学生の看護実践能力を主体的に習得できるよう事例演習を工夫した。そこで本研究では、成人看護学慢性期看護論で看護過程の実践、評価まで実施した SP 参加型の事例演習における学生の学びを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 授業概要

1) 演習時間：90分×2コマを4回（SP演習は2回）

2) 事例：シナリオ1、2で構成されている糖尿病、心不全、白血病、喉頭がんの4事例のうち、グループで1事例担当した。シナリオ1は、実習初日の状況であり、シナリオ2は実習数日目の状況を記したものである。より実習状況に近づけるために、情報を学生に一括で与えるのではなく、シナリオ1は演習前週に、シナリオ2は、第1回目のグループワークの途中で配布した。グループは7～8人で構成され、計10グループで行い、教員が2グループ担当した。なお、糖尿病と白血病の事例は各2グループ、心不全と喉頭がんの事例は各3グループで担当した。

3) 授業の展開方法：(図1、図2)

第1回の演習は、グループワークであり、疾患・治療などの基本的な学習、情報の整理、SP演習の準備を行った。第2回の演習はグループワークとSP演習であり、情報収集、アセスメント、全体像の把握を目的に演習を行った。第3回の演習では、SP演習で得た情報を

いかして、看護問題を明確化し、看護計画を立案した。第4回の演習では、SPの方に対し、看護計画の一部を実施し、評価を行った。

第2回、第4回のSP演習時は、まずグループワークでSP演習の準備をする時間を取り、その後、グループ毎にSP演習を数回実施した。看護師役はその都度、交代し、残りの学生は観察者とした。SP演習終了後、グループ毎にSPの方よりフィードバックをうけた。また授業の最終時に、学生全体の前でSPの方全員にフィードバックしてもらう機会を作った。

4) 本学成人看護学でのSPについて

医学・看護教育でのSPは、背景、教育が様々であるという現状があるため、本学で活用したSPの特徴を以下に記す。本学成人看護学のSPは、診断・治療を目的とする医学教育のSPと異なり、対象の健康と生活に焦点をあて全人的存在として理解し看護過程を実践することを目的として2006年度より導入した。シナリオは、成人看護学実習を行う病院に通院・入院する患者を想定しているため、SPの募集は、病院ボランティア会で通知し、近隣に居住している一般市民の方とした。演習前には、学生の状況、事例及び、演じる上でのポイントを説明する機会をもった。演習では、約10名のSPを必要とするが、3年間ほぼ全員継続協力していただいている。

2. 対象

研究協力に同意の得られた看護系大学3年生58名(74.4%)のレポート。

3. 調査内容

①看護計画を実施した感想、②事例演習にSPの方が参加することについての感想・学んだこと、③事例演習全体の感想（発表も含む）の項目を記述内容とした。

4. 調査期間

2007年6月～7月

5. データ分析方法

SP参加型の事例演習のレポートから学生の学びに関するデータを収集し、Berelsonの内容分析を参考に質的帰納的に分析した。

1) 学生の記述報告を逐語録としてデータ化する。

2) 学生個別に逐語録を精読し、意味の理解できる長さに区切り、分節化した単位を抽象化し個別コードを導く。

3) 全員の個別分析のコードを抽象化していき、サブカ

図1. 授業概要

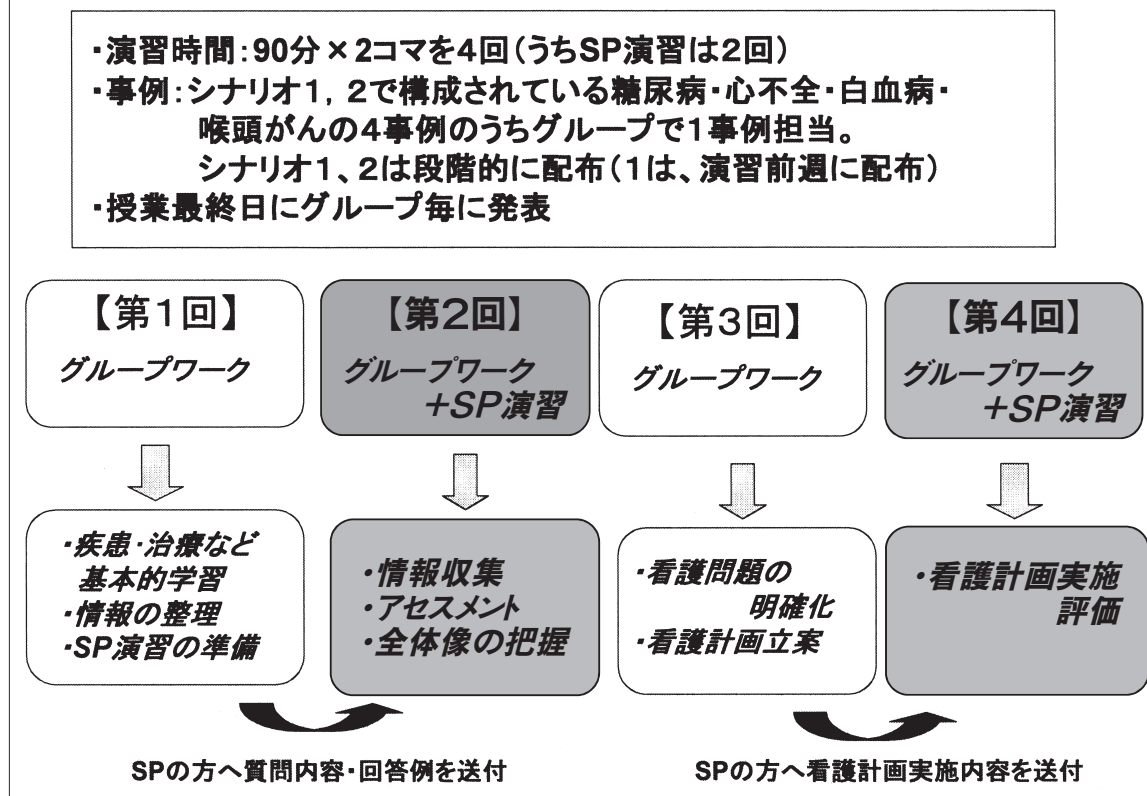


図2 SP演習の流れ



テゴリ、カテゴリ、分類を抽出する。

4) 分類間の関係性を図式化する。

分析結果の信頼性・妥当性の確保のために、同一データを2名の研究者で分析後、分析に加わっていない3名の研究者が、分析過程および分類名、図式化の適切性を確認した。

6. 倫理的配慮

研究者らの所属機関の倫理審査委員会における承認を受け、該当科目の成績公表後調査を開始した。学生へは口頭で参加意思の自由等の説明後、掲示により承諾を得るとともに、研究過程を通してプライバシー厳守等に努めた。

III. 結果

1. 模擬患者 (SP) を活用した成人看護学慢性期事例演習での学生の学び (表1)

研究承諾が得られたのは、78名中58名 (74.4%) のレポートであった。手順に従い分析した結果、146個別コード、38サブカテゴリ、9カテゴリ、4分類へと統合された。以下、【 】 を分類、〈 〉 をカテゴリ、下線をサブカテゴリとして分析結果を4つの分類毎に説明する。

1) 【全体としての学び】

SP を活用した事例演習全体を通して、学生は〈緊張感を保ち実践的な生きた学習体験ができた実感〉を得ていた。SP は、初めて出会う一般の方であり、学生同士や人形相手では感じない緊張感を保ち演習できた、実践に近い状況で患者と関わることができたと緊張感を保ち演習できることを肯定的にとらえていた。また情報が一括して与えられる通常の紙上演習と異なり、自分たちで情報収集をすすめていくことが求められることから紙上事例では得られない生きた患者の情報や反応を自分たちの力で得ることができたと主体的に演習に臨む姿勢がみられた。

2) 【看護過程に関するリアルな学び】

今回の事例演習では、看護過程の情報収集・看護計画の実践・評価でSPを活用することができた。まず、学生は、シナリオの情報を整理したあと、看護問題を明確化するためにSPに対し情報収集をおこなった。その際、学生は、一方的に質問攻めにならないよう気をつけることを心掛けてはいたが、学生にとっては会話の中で情報収集することは容易ではなく、自然な会話の流れを作りながら情報収集することの重要性・困難・未熟さの気づきを学んでいた。また言語的コミュニケーション

ンだけでなく、患者の表情・行動を観察する重要性に気づくことができていた。そして学生同士の演習では、照れや甘えがでることが多いが、SP演習では、SPとの関わりを通じた態度や言葉遣い・行動を気遣う必要性を実感するとともに、SPとのコミュニケーションを振り返り患者と看護師の関係の特性を学ぶ機会となっていた。学生にとって緊張感の高い演習であり、看護師としての態度、役割を考える一方で、患者との信頼関係形成のためには、過度に緊張せず自分らしく接していけばよいという人間対人間の関係形成の重要性にも気づいていた。このように、学生は〈自然な情報交換や信頼関係に有効なコミュニケーションの模索〉をしていた。

今回の演習では、初めてSPの方に看護計画を実施するため、学生は立案した計画内容、実施方法に対する不安を抱いていた。実施を通して、自作のパンフレットを作成したり、禁止事項ばかりでなく代替案をしめすなど患者の年齢・理解度・興味・関心に合致するよう分かりやすく具体的な内容・方法で説明する重要性に気づくことや自分のペースでなく対象者の集中力や負担を考え、1回の援助で優先すべきことを考えて実施する必要性に気づくことなどができていた。これらから〈個性にあわせた看護過程の展開における不安と新たな気づき〉を得ていることが示された。

通常の事例演習では看護計画の立案までとなることが多いが実践・評価の機会を得て、学生は通常の事例演習ではできない看護計画の実践・評価を体験したことで評価の意味を再認識し、評価の方法や視点を考える機会を得ることができていた。慢性的な健康問題をもつ事例のため、看護計画、実践が患者教育に関することになるグループが多く特に教育・指導に対する評価の難しさを実感し、実際の評価を体験することで、〈看護実践の評価の意義を再認識〉できていた。このようにSP演習での情報収集から評価までの体験は、学生にとって実習状況に近く【看護過程に関するリアルな学び】としてとらえられていた。

3) 【自ら学ぶ力をつける】

学生は、SPとのコミュニケーションを通して専門用語を使いがちになるため、専門的な知識を専門用語でなく分かりやすく説明する必要性や一般の人と医療者とでは、病気や治療に関する知識に差があり、理解・解釈が異なることを知ることで、〈専門職としての自覚が強化〉されていた。またSPとのコミュニケーションやケアの実施に対し、SPからの看護ケアやフィードバックにおける肯定的な反応・言動を得た喜びと自信を獲得していた。そして、実際の患者に聞くことが難しい自分の言動

表 1. SP を活用した事例演習からの学び

サブカテゴリー (38)	カテゴリー (9)	分類 (4)
○実践に近い状況で患者と関わることができた ○紙上事例では得られない生きた患者の情報や反応を自分たちの力で得ることができた ○学生同士や人形相手では感じない緊張感を保ち演習できた	1. 緊張感を保ち実践的な生きた学習体験ができた実感	全体としての学び
○自然な会話の流れを作りながら情報収集することの重要性・困難・未熟さの気づき ○情報収集のために一方的な質問や形式的になる傾向がある ○患者の表情・行動を観察する重要性に気づく ○SP の予期しない反応への戸惑いから実践的学びを得る ○看護援助を通したコミュニケーションの重要性に気づく ○SP との関わりを通した態度や言葉遣い・行動を気遣う必要性の実感 ○SP とのコミュニケーションを振り返り患者と看護師との関係の特性を学ぶ ○過度に緊張せず自分らしく接していけばよい	2. 自然な情報交換や信頼関係形成に有効なコミュニケーションの模索	
○患者一人一人の多角性・個性を学んだ ○SP 演習による問題の優先度や重要性の明確化の学びの深まり ○患者の日常生活や興味・関心・性格などの個性を考慮し計画・実践する重要性の再認識 ○立案した計画内容、実施方法に対する不安 ○患者の年齢・理解度・興味・関心に合致するよう分かりやすく具体的な内容・方法で説明する重要性に気づく ○対象者の集中力や負担を考え、1 回の援助で優先すべきことを考えて実施する必要性に気づく	3. 個性にあわせた看護過程の展開における不安と新たな気づき	看護過程に関するリアルな学び
○通常の事例演習ではできない看護計画の実践・評価を体験したことで評価の意味を再認識 ○評価の方法や視点を考える機会を得る ○有効に援助するためにケアの練習、手順確認など準備する必要性に気づく ○SP の方の表情・反応・状況をみながら実施する重要性に気づく ○教育・指導に対する評価の難しさの実感	4. 看護実践の評価の意義の再認識	
○一般の人と医療者とは、病気や治療に関する知識に差があり、理解・解釈が異なる ○専門的知識を専門用語でなく分かりやすく説明する必要性	5. 専門職としての自覚の強化	
○SP からの看護ケアやフィードバックにおける肯定的な反応・言動を得た喜びと自信の獲得 ○実際の患者には聞くことが難しい自分の言動について患者の立場で評価してもらえることがよい刺激になる ○SP の人生経験が生かされた助言に心を揺さぶられる ○演習での体験・学びを実習に生かしたい ○SP の方の熱心な姿勢に学ぶ意欲が高められる	6. 看護する喜びおよび動機づけの獲得	自ら学ぶ力をつける
○グループワークは様々な視点から意見交換でき、成果を共有できる ○グループ内で役割を果たし・メンバーに認められることによる自己効力感の高まり ○全体発表におけるアセスメント・問題の特定・援助方法と看護援助の多様性・他の事例に関する学びの共有 ○全体発表で他のグループの取り組み・頑張りにより学び、自分たちの演習や発表を振り返り改善課題を見出す	7. 学生相互間の学びの促進と課題の明確化	
○慢性期にある患者のセルフケアや精神面へのケア立案の難しさの実感 ○行動変容は難しく看護者が患者とともに考える姿勢が重要であるという気づき ○慢性期にある患者へ長期的視点を持ち関わる必要性への気づき	8. 慢性期にある患者への看護の特徴と難しさの実感	自ら学ぶことの困難
○SP と実際の患者は違う ○実習では一人で看護過程を展開していくことへの不安	9. 実習に対する予期的不安の顕在化	

について患者の立場で評価してもらえることがよい刺激になると前向きにとらえるとともに、一般のSPの方が自分たちの教育に協力的なことや将来の自分たちに期待していると感じ、SPの人生経験が生かされた助言に心が揺さぶられたり、SPの熱心な姿勢に学ぶ意欲が高められたことが、〈看護する喜びおよび動機づけの獲得〉につながっていた。

演習は、グループワークが中心であり、グループワークは、様々な視点から意見交換でき、成果を共有できることや、全体発表で他のグループの取り組み・頑張りにより、自分たちの演習や発表を振り返り改善課題を見出すなど〈学生相互間の学びの促進と課題の明確化〉ができるとしていた。これらは、【自ら学ぶ力をつける】ものであった。

4) 【自ら学ぶことの困難】

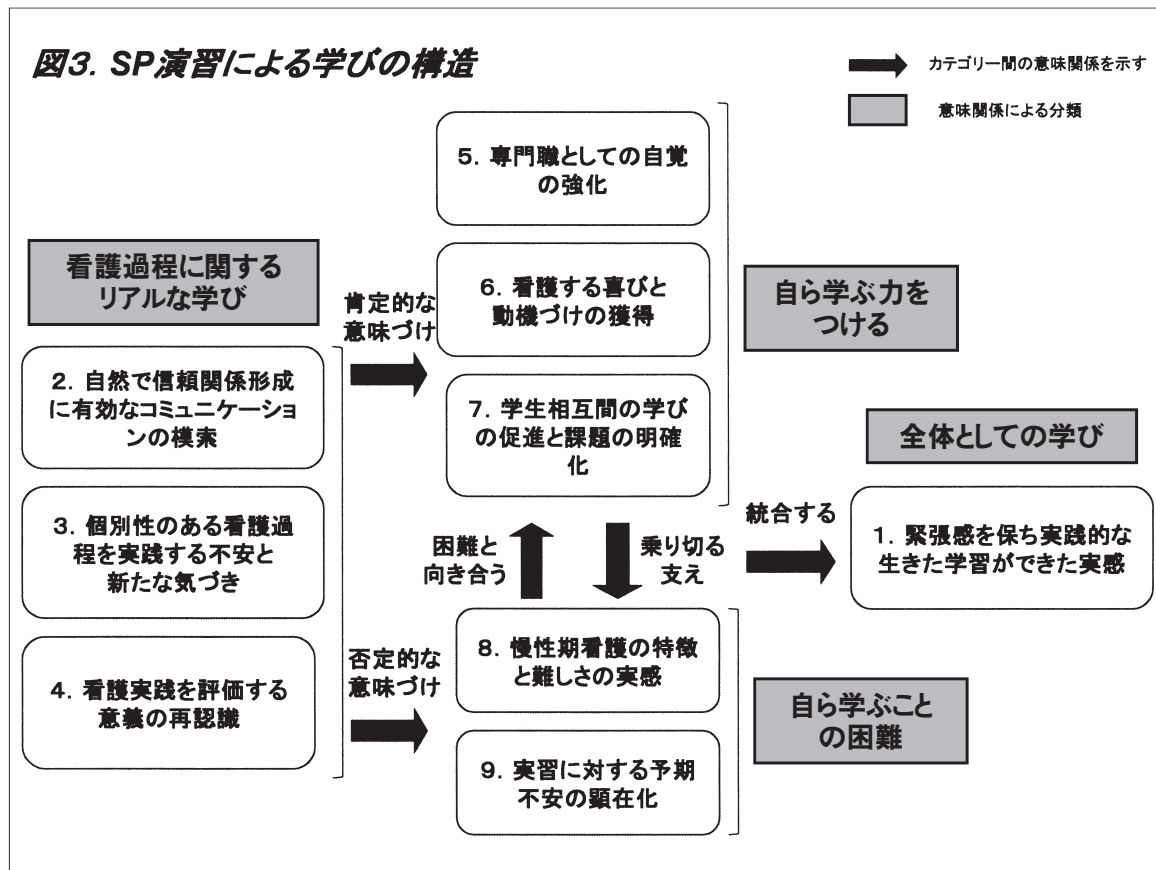
慢性期にある患者の事例であるため、学生はセルフケアが自立している患者のケアは何を行えばいいのか悩み、慢性期にある患者のセルフケアや精神面へのケア立案の難しさを実感した。また慢性的な健康問題により行動変容の必要のある患者に対し、行動変容は難しく看護者が患者とともに考える姿勢が重要であるという気づきや長期的視点をもって関わる必要性に気づくことがで

き、〈慢性期にある患者の看護の特徴と難しさの実感〉をえていた。

SP演習は、学生にとってリアルな学習であるが、学生は、SPと実際の患者は違うともとらえていた。また演習ではグループワークで看護過程を展開できたが、実習では一人で看護過程を展開していくことに不安を感じている学生もあり、SP演習により、〈実習に対する予期的不安の顕在化〉がみられた。

2. SP演習による学びの構造 (図3)

4つの分類を中心的意味により構造化した結果、図3のように示された。SP演習により学生は、【看護過程に関するリアルな学び】を得ていた。学生はそのリアルな学びを【自ら学ぶ力をつける】と肯定的にも意味づける一方、【自ら学ぶことの困難】と否定的にも意味づけていた。このようにSP演習は、実習前に困難に向き合うきっかけになり、【自ら学ぶ力をつける】ことが、困難を乗り越える支えになっていた。そしてこれらの学びの体験を通して学生は、実践的な生きた学習ができたという【全体としての学び】を得ていた。



V. 考 察

1. 一般市民がSPであることで得られた学び

看護教育の中でSPを活用する際、SPは、教員や上級生、看護職をはじめとする医療職、一般市民などの場合がある。本研究の特徴は、教員や医療者でなく一般市民のSPで看護過程を実践・評価まで実施した点である。一般市民がSPをすることで学生は、学生同士や人形相手では感じない緊張、不安を抱きながらも肯定的にとらえ、主体的で真剣な姿勢で演習に臨む姿勢が見られた。これは、学生自身がSP演習をより実習に近いリアルな状況であると理解し、緊張感を保ちながら演習を行うことで、実習に向けてより効果的な学習になるという認識が生じるからだと思われる。その認識が演習に取り組む姿勢に影響していると思われる。また学生は初対面のSPとの信頼関係形成に向け、学生や教員との関わりだけでは、甘くなりがちな態度や言葉遣い、行動を気遣っていた。このようにSPが参加することは、演習に対する意欲・姿勢・態度に影響を及ぼす面が大きいことは他の演習での研究（相原ら、2007、肥後ら、2006、出原ら、2006）と同様だった。

今回の事例演習でのSPは一般市民であるため、学生にとって、より患者に近いリアルな状況であることに加え、一般市民が自分たちの教育に熱心に関わってくれること、看護職に対する一般市民の希望や期待を知ることができ、そのことが看護する喜びと動機付けの獲得により一層つながったと思われる。また一般市民をSPとすることで、専門用語をより分かりやすく説明する必要性に気づくなど、専門職としての自覚の強化につながったと思われる。これらのことから、SP演習の利点としてフィードバックがあげられているように、学生の学びをより深めるために、SPのフィードバックが非常に重要な役割を果たすことが示唆される。このように一般市民をSPとして活用することは、実習に近いリアルな状況から学生の態度・姿勢・看護する喜び、動機付けを高める面では他のSPを活用するよりも学びが大きいのではと思われる。

2. SP参加型事例演習で実践・評価まで実施した学び

看護教育におけるSP参加型の演習は、現在コミュニケーションや患者理解・実技試験に活用しているものが多い。今回の事例演習においても、情報収集場面や、看護計画の実施の場面でのコミュニケーション技術や、患者の個別性の理解、看護実践における注意点などを総合的

に学ぶことができていた。

特に自分たちが立案した計画を実施・評価したことで、患者の関心・負担を考慮した個別性のある実践を工夫したり、評価の方法や視点を考え、評価の難しさを実感しながらも評価の意義を再認識できたことの学びは大きい。このように一連の看護過程をSP参加型の演習で実施できたことで、SPの反応を見ながら、自分たちの実践をダイナミックに振り返る機会となっていた。このように学生にとってリアルな演習であるゆえ、肯定的にとらえられることが多い反面、実習に対する不安が顕在化する面もあった。しかし、SP演習により実習をイメージし、自己の課題を明確化する機会にもなること、実習ではじめて患者に対応するよりも学生がSP演習で慣れておくことで実習での過度な緊張が軽減される可能性もある。

このようにSP参加型の事例演習は、リアルな状況により、患者との信頼関係形成に必要なコミュニケーション能力・知識・技術の獲得の必要性に気づくとともに、一連の看護過程を体験できることで、効果的な実習の準備教育であり、看護実践能力の向上につながると考える。

3. 慢性期看護論でのSPの活用について

慢性期看護論では、生活習慣病やがん・難病などの疾患により慢性的な健康問題をもつ成人期にある人々の対象理解と看護ケアについて学ぶ。しかし長期に療養する患者が慢性的な健康問題に対処するために生活を再構築・再構成する過程を学生がイメージすることは難しい。また患者教育は、患者と看護師の相互作用であり、患者の生活背景などの個別性を配慮し、患者が自分自身でセルフケアできるように導くエンパワメントの実践やコミュニケーションスキルを講義のみで理解することも難しい（山本ら、2006）。今回のSP参加型の事例演習で、学生は、慢性期にある患者への看護の特徴と難しさの実感や、患者教育の場面で、わかりやすく具体的な内容で説明すること、優先度を考えて実施する必要性、患者一人一人の多様性や個性を学ぶことはできていた。しかし、本学ではSP参加型の演習は成人看護学領域で実施するのみであり、学生が、慢性期にある患者の対象理解やケアよりも患者との関係形成における態度などコミュニケーションに関心が向く傾向にあった。今後、SPの活用は、まずコミュニケーションスキルの学習目的でより早い時期に導入後、様々な領域で実施することや、事例内容を精選することで、より演習目的になったSP演習が実施できると思われる。

VI. 結 論

- 成人看護学慢性期看護論の SP 参加型事例演習の学びを分析した結果、38サブカテゴリー、9 カテゴリーが抽出され、〈看護過程に関するリアルな学び〉、〈自ら学ぶ力をつける〉、〈自ら学ぶことの困難〉、〈全体としての学び〉に分類できた。
- SP 参加型の事例演習は、学生にとってリアルな学習であり、効果的な実習の準備教育となり、看護実践能力の向上を促すと考える。
- SP 参加型の事例演習では、特に SP からのフィードバックがもたらす影響が大きく、学生の学びを深めることが示唆された。
- 慢性期看護において、SP を活用することは、患者の個別性や慢性期にある患者への看護の特徴や難しさを実感できる機会となる。

文 献

- 1) 相原優子他 (2007)：模擬患者を活用した看護アセスメント演習の評価、日本看護医療学会雑誌、9 巻、1 号、pp.27-38.
- 2) 出原弥和 (2006)：SP を導入したコミュニケーション演習の評価、三重看護学誌、8 巻、pp.93-100.
- 3) 藤崎和彦 (2001)：看護教育における SP (模擬患者) 活用法の可能性 模擬患者によるコミュニケーション教育 その歴史とコミュニケーションのポイント、Quality Nursing、7巻、7号、pp.18-24.
- 4) 肥後すみ子他 (2006)：SP 導入によるコミュニケーション演習に基づく学習効果と教育技法の評価、岡山県立大学保健福祉学部紀要、2 巻、12号、pp.33-43.
- 5) 加悦美恵他 (2007)：SP (模擬患者) 参加型授業において学生が思い描く患者像の理解、日本医学看護学教育学会誌、16巻、pp.20-26.
- 6) 加悦美恵他 (2006)：基礎看護学における SP 参加型の授業と臨地実習の連携－学生の臨地実習の体験のふりかえりから－、日本看護科学学会誌、26巻 2 号、pp.67-75.
- 7) 三沢久恵他 (2007)：模擬患者参加による認知症高齢者演習の学習効果、共立女子短期大学看護学科紀要、2 号、pp.69-80.
- 8) 宮崎貴子 (2005)：日本の看護教育における SP (模擬患者/標準模擬患者) 参加型学習の実態に関する文献検討、日本赤十字武蔵野短期大学紀要、第18号、pp.51-56.
- 9) 清水裕子他 (2008)：看護教育における模擬患者に関する研究の特徴、日本保健科学学会誌、10巻、4 号、pp.215-223.
- 10) 植田喜久子他 (2002)：看護実践能力を高めるための学内演習の実際 成人看護学、Quality Nursing、8 巻、10号、pp.18-24.
- 11) 山本裕子 (2006)：模擬糖尿病患者を利用した慢性看護学演習の効果と課題、大阪府立大学看護学部紀要、12巻、1号、pp.1-10.

Abstract

In Japan, as medicine has become more advanced and complex in recent years, it has become increasingly important for nursing students to consistently acquire practical nursing skills during basic nursing education. Our university's adult nursing department has adopted a participatory case practicum using a simulated patient (SP) within the chronic nursing curriculum in adult nursing to allow students to proactively and consistently acquire practical nursing skills such as nursing process development and interpersonal relationship formation.

The aim of the present study is to clarify student learning through a participatory case practicum using an SP within the chronic nursing curriculum in adult nursing. The results showed that a total of 9 categories and 38 subcategories were extracted and classified into the following aspects of learning: "realistic learning of nursing processes", "acquisition of self-learning skills", "difficulties associated with self-learning" and "overall learning". The participatory case practicum using an SP is a type of learning that is realistic to students, effectively prepares students for clinical practicums, and improves practical nursing skills. Also, in the participatory case practicum using an SP, the effects of feedback from the SP play a large role in deepening students' understanding.

Key words: Simulated patient (SP), chronic nursing care, case practicum, practical nursing skills.